

大阪・広島藩大坂蔵屋敷跡

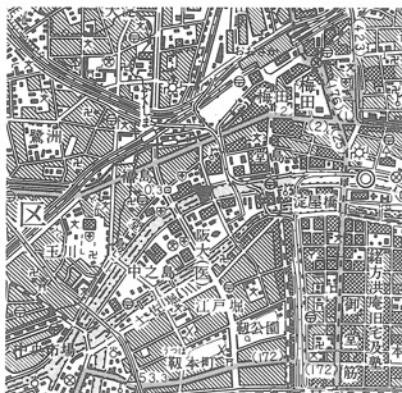
ひろしまはんおおさかくらやしき

継続して行なわれ、蔵屋敷の全貌が明らかになりつつある。

幸い、広島藩蔵屋敷については二種類の詳細な絵図が今日に伝わっている。それによれば、蔵への荷揚げのため、北側に流れる堂島川から屋敷内に水を引き入れた「船入」が描かれている。一九九六年度の調査では、この船入遺構が良好な状態で保存されていることが確認され、船入内部の堆積土から約三〇〇点の木簡が出土した

- 1 所在地 大阪市北区中之島四丁目
2 調査期間 一 一九九九年度調査 一九九九年（平11）六月
（一〇〇〇年一月）
二 二〇〇〇年度調査 二〇〇一年一月～三月

- 3 発掘機関 (財)大阪市文化財協会
4 調査担当者 一 岡村勝行・李 陽浩、二 岡村勝行
5 遺跡の種類 蔵屋敷跡
6 遺跡の年代 江戸時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



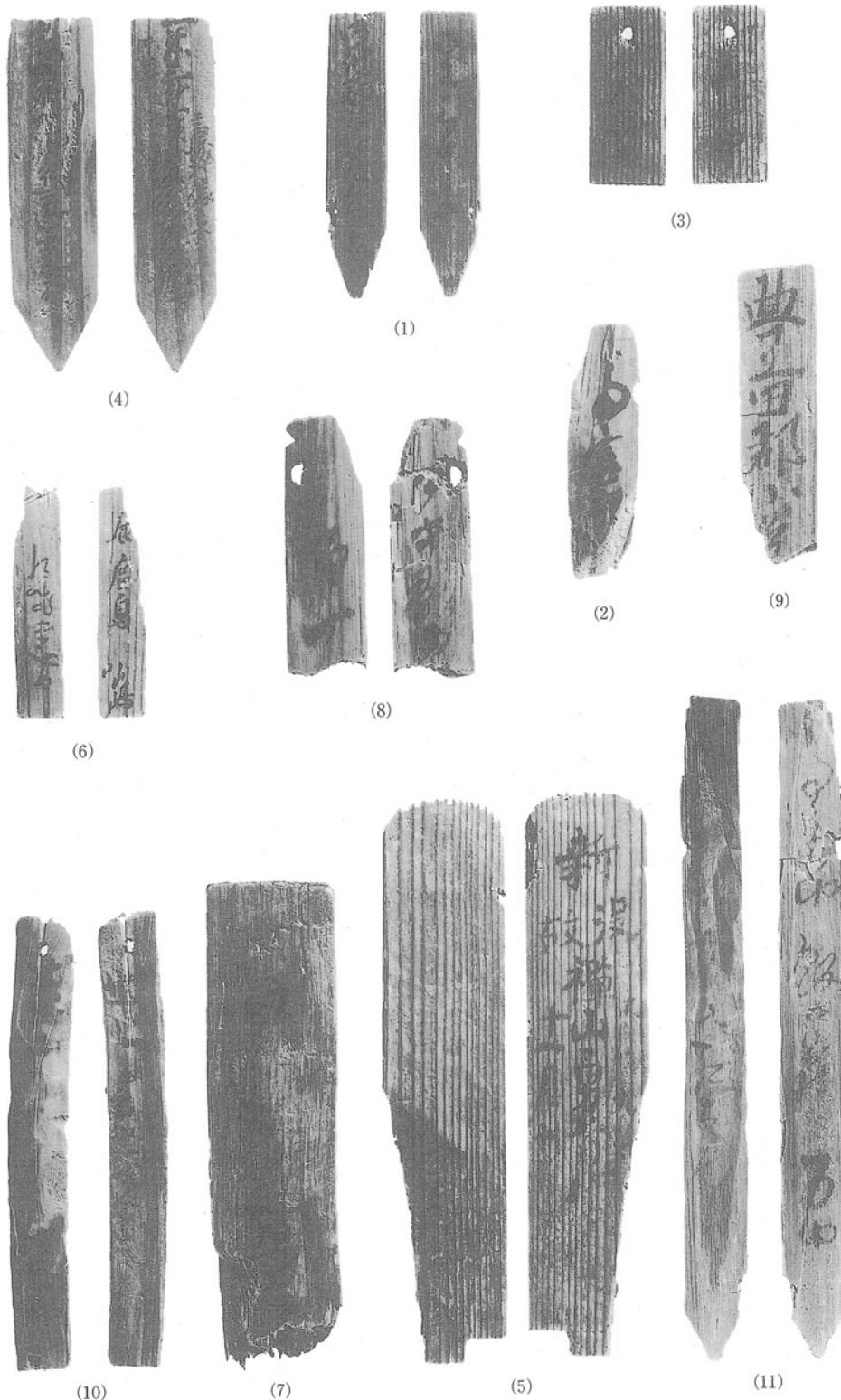
(大阪西北部・大阪東北部)

本遺跡は堂島川と土佐堀川に挟まれた中之島に位置する。江戸時代、周辺には諸国の大名が蔵屋敷を構え、全国の物流・経済の中心になっていた。発掘調査は大阪市立近代美術館（仮称）の建設に伴う事前調査として、一九九五年度から毎年

一九九九・二〇〇〇年度は、船入遺構の全体及びその東に広がる屋敷地を調査した。木簡はすべて船入から出土し、そのうちのほとんどが、船入が機能していた時の堆積土最上層である砂質シルト層から見つかった。船入の埋土は全面掘削せず、石垣から3m幅のみの掘削に留めたが、二〇〇点以上の木簡が出土した。木簡には「明治四年」と記されたものもあり、船入がこの時期まで機能していたことが判明した。

木簡は現在整理中であり、完形に近く、保存処理が済んでいるものの紹介する。また、同一遺構からの同様の状況での出土のため、一九九九年度調査出土分と二〇〇〇年度調査出土分を分けずに一括して報告する。なお、紹介できないものを含めると、今回の出土木簡に記された郡名としては、世羅・高田・御調・高宮・賀茂・久米・佐伯・豊田・アキ・津高を確認している。

2000年出土の木簡



- (1) • 「御米三十入」
• 「御調郡三庄村庄屋」
[高宮郡] (2)
- [下カ] (3) • 「○□喜二郎」
• 「○□喜二郎」
[高城村俵主] (4)
- 一米三斗五升 (5) • 「高田郷□正」
未年 後藤堅蔵
[高田郷□正] (6)
- 新没天保九戌[土カ]
新故禅山勇道信□
十一月十一日 (7)
- 〔人物画〕□ (8)
- 〔人物画〕□ (9)
- 〔豊田郡□小カ〕 (10) • 「○世の郡□□□」
• 「○米□□□」 (11)
- 84×35×11 011
〔高宮郡 飯室村 □助〕 (12)
- 〔□□ 右衛門〕 (13)
- 307×30×4 051
〔高宮郡 飯室村 □助〕 (14)
- 212×28×7 011
〔高宮郡 飯室村 □助〕 (15)
- (123)×34×10 019
〔豊田郡□小カ〕 (16)
- (142)×37×5 019
〔○世の郡□□□〕 (17)
- (122)×37×5 039
〔△印十〕 (18)
- (144)×37×5 019
〔△印十〕 (19)
- 135×28×9 051
〔△印十〕 (20)

(1)の「十」は「斗」の可能性もある。出土木簡は(1)(2)(8)～(11)のように、郡名や村名の書かれているものが多く、(4)のように郷名の書かれているものは少ない。これらのなかには、送り主や品名の書かれているものもあり、一九九六年度出土の木簡（本誌第一九号）と同じく広島藩の国元から大坂へ運ばれてきた荷物に付けられた荷札木簡と思われる。(5)は位牌で、下に台座がつく。(7)の人物は横顔が描かれており、大きなお腹をした男性である。

(岡村勝行・鳥居信子)

(260)×125×8 061
110×13×8 011
(225)×60×15 065